

# Cover Presentation

松本 大  
Text by MATSUMOTO Dai  
建築家  
都市環境マネジメント研究所 研究員  
松本大建築設計事務所 代表

藩政時代の金沢には、このような一万石以上の重臣十二家の屋敷が市中に点在していた。津田玄蕃邸の前に立ち、当時の加賀藩城下をイメージしてみたとき、その壮麗さを具体的に身に迫るものとして感じることができる。そのことが、重臣屋敷の唯一の遺構として津田玄蕃邸が残されている意味であると思う。

現在、「武家屋敷群」と呼ばれ、金沢市長町などに残っている屋敷跡は、平土と呼ばれる直臣の中級武士のもの



菱形格子となつている。装飾によって、斬新で華麗なグラフィック効果を生みだしている。御殿建築とも呼ばれる、桃山様式を色濃く受け継いだものだ。玄関土間部分の戸室石が斜め市松模様美しく敷き込まれており、ここにもグラフィックな意識が見て取れる。玄関奥の式台床板も一枚物の厚板で重厚に作られている。



のが主であり、万石クラスの重臣の屋敷はことごとく現存していない。規模の大きさ、壮麗さゆえに、明治になって以降、そのまま個人が受け継ぐこともできず、役所や軍用地に転用されていったと考えられる。そのような流れにも関わらず、津田玄蕃邸は大正期に移築された。

その経緯は不明だが、明治以降の屋敷の推移と無関係ではないと思われる。明治三年に、金沢藩は津田邸に医学館を置き、西洋医学の教授と患者の治療に使用した。明治八年に医学館は県立となり、石川県金沢病院と改称。翌明治九年、医育部門は金沢医学所、医療部門は金沢病院と



## 旧津田玄蕃邸 (金沢市)

**金** 沢市、兼六園の一角にある旧津田玄蕃邸は、加賀藩重臣の屋敷の一部であり、石川県における近代医学発祥の記念碑的な遺構でもある。かつて、この屋敷を舞台に、石川の近代医学教育が産声を上げたからである。

津田玄蕃邸は金沢城大

手門のすぐ前に、八家のひとつ前田家（長種系）と並んだ重要な位置に建っていた。医学教育施設として使用されなくなった後、明治四十五年以降は医師会館として、その後は乃木会館として使用された。大正十二年、県は屋敷を兼六園内の現在地に移築し、兼六会館と改称した。県の分室が置かれたほか、県金沢城・兼六園管理事務所として現在に至っている。

創建当時の様子をよく残す、正面玄関部分を見る。重厚、豪華、華麗な印象を受ける。書院造の表玄関として、位の上位の貴人を迎え入れた儀礼的な性格が強いのだろう。

建物本体の、妻側から突き出た玄関部分は湾曲し、アクセントを強めた唐破風と呼ばれる屋根を持っている。その表面には、様々な壮麗な装飾が施されている。蛙股中央に大きな龍の彫り物、下地となる板面には全面、同一の文様が彫り込まれている。その下の欄間は細い二本組みの

なり、明治十二年に金沢医学校と改称され、明治末まで津田邸は医学教育の殿堂であり続けた。

高度な医学教育の系譜が津田邸を基点に生まれ、後の第四高等学校医学部、金沢医学専門学校、金沢医科大学、そして第二次大戦後の金沢大学医学部へと連綿とつながったところにも、津田邸の存在理由と歴史的な意義があるといえる。その愛着と記念の意味において、保存移築されたのではないかと推測される。

このような貴重な遺構であるが、現状の保存・公開のあり方は少々寂しく、市民によく認識されているとはいえない。大手門前の元の敷地での復元を求める有識者の指摘もある。これらは、なかなか難しい事業であると感じるが、大手門の修景なども絡めた、津田玄蕃邸の偉容を「都市の重層性」の一風景として見てみたい気がする。

### メモ 旧津田玄蕃邸

金沢市大手町に存した加賀藩一万石家老津田玄蕃邸の遺構。宝暦の大火後の建設と伝えられる。建物内部は度々の改造が行われているが、玄関部分は当時の姿を留める。大正時代に兼六園内地に移築された。現在は県金沢城・兼六園管理事務所として使用されている。

表紙  
プレゼンテーション  
プレゼンテーション

金沢城下の壮麗さを物語る重厚な御殿建築  
高度な近代西洋医学教育の系譜を生んだ場所